



実りの秋を迎えた附属農場（学内農事部）





附属農場唐湊果樹園におけるカキの収穫



附属農場学内農事部におけるサツマイモの収穫

目 次

1. 巻頭言 「新型コロナ禍」が収束した時、あなたは何に挑戦していますか	藤 田 晋 輔	2
2. 「ダブル・ディグリープログラム」いよいよ開始です！	橋 本 文 雄	3
3. 「コロナ禍の中での就職活動」.....	寺 岡 行 雄	4

ビバ・キャンパスライフ

●農業生産科学科

4. 応用植物科学コース 「好きなことを学べる幸せ」.....	植物育種学研究室	修士2年	湯 山 祐 樹	5
5. 畜産科学コース 「〇に染まった大学生活」.....	家畜育種学研究室	学部4年	岩 野 聖 史	5
6. 食料農業経済学コース 「自己投資額200万」.....	農業経済学研究室	学部4年	下 田 真由美	6

●食料生命科学科

7. 食品機能科学コース 「高校からの友人とバスケット」.....	生命高分子化学研究室	学部4年	内立輪 皆 斗	6
8. 食環境制御科学コース 「エリアンサスと共に」.....	植物栄養・肥科学研究室	修士1年	川 寄 諒 也	7
9. 焼酎発酵・微生物科学コース 「ついに『住めば都』を感じた」	醸造微生物学研究室	修士1年	李 愛友美	7

●農林環境科学科

10. 森林科学コース 「責任の重要性」.....	森林政策学研究室	学部4年	吉 井 聖 裕	8
11. 地域環境システム学コース 「遠方の同朋」.....	農地工学研究室	修士2年	中 野 瑞 希	8

●国際食料資源学特別コース（農学系サブコース）

12. 「鹿児島での海人生活」.....	植物栽培・機能学研究室	学部3年	洪 谷 啓 太	9
----------------------	-------------	------	---------	---

教育実習奮闘記

13. 「教育実習奮闘記」.....	農業生産科学科 家畜育種学研究室	学部4年	桐 田 友理乃	9
14. 「教育実習を終えて」.....	食料生命科学科 食品分子機能学研究室	学部4年	小 田 莉 央	10
15. 「教育実習を振り返って」.....	農林環境科学科 農地工学研究室	学部4年	川 東 史 佳	10

インターンシップ体験記

16. 「インターンシップを終えて」.....	農業生産科学科 害虫学研究室	学部4年	神 田 梨 華	11
17. 「インターンシップを終えて」.....	食料生命科学科 土壌科学研究室	学部4年	大 坪 季 生	11
18. 「オンライン企業訪問体験記」.....	農林環境科学科 砂防・森林水文学研究室	学部4年	貴 島 万 萌	12

就職活動体験記

19. 「コロナ禍の中の就職活動体験記」.....	農林水産学研究科 害虫学研究室	修士2年	大 野 竜 弥	12
20. 「苦しみながらも戦えた私の就職活動」.....	農林水産学研究科 食品化学研究室	修士2年	里 圭 太	13
21. 「就活体験記」.....	農林環境科学科 森林保護学研究室	学部4年	池 田 裕 作	13

留学体験記

22. 「コロナ禍のニュージーランド留学」.....	農林環境科学科 農地工学研究室	学部4年	宮 原 直 也	14
----------------------------	-----------------	------	---------	----

編集後記.....				15
-----------	--	--	--	----



「新型コロナ禍」が収束した時、 あなたは何に挑戦していますか

鹿児島大学農学部あらた同窓会
会 長

藤 田 晋 輔

令和3年4月鹿児島大学農学部に入學された皆さん、遅まきながら、入学おめでとうございます。今年も私共農学部あらた同窓会に新進気鋭の学生会員の皆様をお迎えでき、大変嬉しく思います。

農学部あらた同窓会は、「あらたの地」で学んだ約2万名（物故者を除くと1.6万名）の正会員（卒業・修了生）と学生会員との相互の縦の連携の場作りを積極的に支援し、一緒に温故知新を含めた未知の課題（技術）を発掘し、挑戦・解決の糸口を創る大きな役割があると考えています。

周知のとおり、母校は明治41（1908）年南方開発の使命を礎に2番目の官立高等農林専門学校である「鹿児島高等農林学校」としてこの地に開学しました。その後、昭和19（1944）年に鹿児島農林専門学校に改称、戦後、鹿児島大学農学部へと発展、大学院農学研究科（修士課程）、大学院連合農学研究科（博士課程）、大学院農林水産学研究科（修士課程）等の設立と、時代の流れを先取りしてきました。現在、鹿児島大学は「地域と共に社会の発展に貢献する総合大学」を目指していますが、農学部も積極的に参加して教育・研究を行っています。開学113年の歴史を刻み、今日も多くの先輩諸氏は、国内外で行政や教育・研究に、また実業・産業界において活躍中です。

さて、令和2年新年に中国武漢市で発生した「新型コロナ」が数日の内に世界中に拡散しました。従来のインフルエンザと比較して、大変なウイルスであることが明らかになっていますが、収束は遠そうです。ウイルスは発生場所、時間軸に関係なく、再び新種、または「新型コロナ」の新亜種が発生することもあるそうですが、これらに対応できるワクチンがアプリの的に醸成できる規則性が解明されることを期待したいものです。

ところで、日本はIT環境の技術開発だけでなく、多くの事象の技術開発が諸外国より20年以上遅れています。残念ながら、今回も海外からの技術輸入によりIT環境の急速な進展や対応アプリが短時間の内に充実し、ZOOM等の導入によるWeb会議、オンラインによる講義、大部分の学会もZOOMを介した開催となる等、IT環境は確実に進化しました。これは「新型コロナ」の大きなポジティブ効果でしょう。

ところで、愛媛県出身の90歳の気象物理学者真鍋淑郎博士の「地球温暖化を予測する地球気候モデル開発」に2021年度ノーベル物理学賞が授与されました。わが事のように嬉しいです。何故なら、25年前「わが基軸研究のすきま」の応用編として「地球温暖化対応のゼロエミッションとエネルギー化」に取り組みました。この課題は台所に発生した「生活ごみ」を主原料とした有機系廃棄物からガス（メタン）を獲得、天然ガスに添加して台所にエネルギーとして届ける構想で、キャッチフレーズは「台所から台所へ」としました。この構想が60万都市鹿児島市の環境整備事業となり、市民の台所にエネルギーとして届くことになりました。令和4（2021）年度初めに操業に入る予定になっています【平成24（2012）年度策定〔平成33（2021）年度稼働目標、令和3年7月から試運転中！】】。

最後に皆さんへの「いざない」です。皆さんは何かを目標に大学に入学し、勉学に励んでいると思います。秋も深まり、これから凌ぎやすい季節になります。オンラインの「すきま」で清々しい空気を吸いながら、「挑戦する課題」の「種探し」に農学部・農場を散策しませんか？そこには先輩たちが汗を流しながら、卒業研究に取り組んでいる姿に出会います。思い切って質問してみても？先輩達が挑戦している卒業研究の構想を聞けば、皆さんの目標に対するヒントが透けて見えるかも。



「ダブル・ディグリープログラム」 いよいよ開始です！

農学部長
橋本文雄

あらた同窓会、在校生の皆様、こんにちは。いかがお過ごしでしょうか？

鹿児島大学大学院農林水産学研究科（農水研）修士課程では令和4（2022）年4月1日より中国・湖南農業大学（湖南農大）と「ダブル・ディグリープログラム（DD）」を開始いたします。簡潔にご紹介すると、「両大学へ入学（二重学籍を取得）し、3年間の在籍期間中、双方の大学へ1年間留学（派遣と受入を）し、両大学へ提出した修士論文が審査に合格後、湖南農大の修士の学位（農業）と本学農水研の修士の学位（農学）の、二つの学位を習得することのできるプログラム」です。

その意義として、①一つの大学では得られない高度で付加価値の高い学修機会の獲得、②複数の国の高等教育機関等が共同で提供した教育プログラムを学修することによる優位性の証明、③労働市場や進学など国際的に評価されるキャリア形成、④より短い期間、少ない経済的負担で複数の大学の学位取得、とされています。

今から7年前の平成26（2014）年11月14日、中央教育審議会の大学分科会の中で、「大学教育のグローバル化に関する課題として、DDに続いて、今後、我が国の大学が外国の大学と共同で単一の学位記を授与するJD（ジョイント・ディグリープログラム）等、…中略…学位及びプログラムの質を保証し、ひいては国内外の高等教育の質の保証及び更なる向上につながることを期待して、策定するものである」と方向性が示されました。

湖南農大をご紹介します。現在、約2万2千名を超える学生が通う総合大学です。今回、プログラムを締結した大学院（学院）は、食品科学技術学院、園芸学院、動物科学技術学院の3つの学院ですが、湖南農大はこれらの3学院を含む20の学院で構成されています。湖南農大の前身は清朝末期の1903年10月に清政府により設立された「私立修業学堂」です。その後繰り返し改組が行われ、1951年3月に湖南省立の大学として正式にスタート、1994年3月に現在の湖南農大へ改名、117年の歴史を持った大学です。1989年6月2日に学部間学術交流協定を締結し、以降、32年間に渡って交流が盛んに行われてきました。2019年10月30日には両校の協定締結30周年をお祝いするためミニ式典が挙行されました。

平成30（2018）年4月26日付、前学長・前田芳實先生（農学部長：2006年4月～2009年3月）よりDDプログラムの募集があり、これに農水研の設置準備期間中に申請、同年7月6日付で採択されたことから本格的にDDの交渉を開始、令和2（2020）年度締結に至りました。これまでは1年間休学して留学した場合、修士課程を3年掛けて修了しなければならなかったものが、同じ年月を費やすことにより、留学の経験のみならず二つの学位を取得することのできる、キャリアアップには待望のプログラムです。

農水研は4つの専攻が参画し、入学の時期は、湖南農大は9月（鹿大から派遣）、農水研は4月（湖南農大から受入）となり、留学期間は双方1年間です。農水研に進学を希望される学生の皆様にはDDへ参画してみませんか？国際感覚の醸成のみならず、国際的なキャリア獲得を目指して挑戦されてはいかがでしょうか。



「コロナ禍の中での就職活動」

農学部副学部長
(前就職委員長)

寺 岡 行 雄

鹿児島大学では令和2年3月中のイベント等の原則中止または延期の要請を行い、さらに、令和2年3月24日には学生及び教職員に対し、私事渡航を含む海外渡航の自粛要請が行われました。3月25日には、令和2年度前期授業の開始日を4月20日に繰り下げる通知がだされました。令和2年3月26日に鹿児島県内で初めての感染者が確認され、令和2年度就職活動は大きく変容しました。就職活動中の学生へ県外での就職活動は控えること、特に、三大都市圏（首都圏、近畿圏、中部圏）及び北海道へ赴くことは原則禁止とされました。就職活動に限らず、万一首都圏、近畿圏、中部圏及び北海道に赴いた場合には、帰鹿してから2週間は自宅待機とし、授業も出席停止とし、友人・知人との接触や学内への立ち入りは避けるよう、学生へ通知されるようになりました。

企業の採用担当者へはこのような事情への理解を求め、本学学生が会社説明会に参加または採用試験を受験する際には、日程の延期あるいはWeb説明会やWeb面接等、対面によらない方法を学生にご提示いただくよう、鹿児島大学として就職活動への配慮をお願いをしました。

このようにして始まった令和2年度就職活動ですが、その結果はというと、全学での就職率は96.2%となり、前年度よりも1.3ポイント高くなりました。農学部について少し詳しく見ると、卒業者198名のうち就職希望者が129名、就職者数は127名で就職率は98.4%でした。前年度と比べると0.3ポイント下がっていますが、就職希望者のほぼ全員が就職できました。就職先の内訳を高い順に見ると、公務員が27%、建設・製造業が20%、卸売・小売業とサービス業が共に14%でした。地域別に見ると、鹿児島県内が28.3%、九州内が29.9%、関東圏が22.8%でした。県外への移動が厳しく制限される中、企業の理解もあり、Web面接での採用活動が普通になりました。就職希望学生の努力もあり、それほどの不利益が生じなかったことは幸いでした。また、大変ありがたいことに、企業・団体等からの農学部への求人が落ち込むことはありませんでした。

農学部の就職支援活動としては、令和2年9月30日に『きばいやんせ鹿児島・九州—魅力ある農林食品産業』と名付けて、農学部業界研究フェアをWeb上で開催しました。全体説明の後、各社が説明する40分のコアタイムを3回繰り返す仕組みでの開催でした。主に鹿児島県内の10社が参加され、延べ109名の学生が説明を聞かせて頂きました。

最近インターンシップが就職活動で重要な位置づけになってきています。単なる職場体験というよりは、採用活動の一環として実施する企業も多く、3年生以下の夏休み等で積極的に取り組んでいます。とは言え、令和2年のインターンシップは新型コロナウイルス感染症対策として、Webでの職場体験も多くありました。

農学部の学生が、希望する職業に就職できるよう情報の提供からセミナーの開催など手厚く支援を行っています。大学としても就職というだけでなく学生のキャリア形成の支援にしっかりと取り組んでいます。



農業生産科学科

応用植物科学コース
(農林水産学研究科・農林資源科学専攻
・植物生産科学コース)



「好きなことを学べる幸せ」

植物育種学研究室

修士2年 湯山 祐樹

私は植物の品種改良に興味を持っています。品種改良に関する講義の中で新品種の育成ばかりでなく、野生近縁種や伝統野菜など在来種の遺伝資源の保存の重要性について学ぶ機会がありました。大学に入学するまでは品種改良して有望な特徴をもつ品種が出来れば良いと考えていましたが、遺伝資源がなければ新しい品種を生み出すことが出来ないと知り、鹿児島県の伝統野菜に興味を持つようになりました。

そのように考える中で、学部3年時に農場実習で自分の好きな作物を栽培する自主栽培に取り組みました。私は、日置市東市来で栽培されていた「養母すいか」を栽培しようと思いました。しかしながら学内に種子がなかったため、「養母すいか」の栽培に取り組んでいらっしゃる船倉保さんを紹介していただきました。船倉さんは途絶えていた「養母すいか」を復活させ、市販品種より糖度の低い「養母すいか」をどうしたら糖度を高くすることが出来るのか栽培方法を研究するなど、献身的に取り組まれている農家さんです。私は種子を分けていただくばかりでなく、栽培に関する様々なアドバイスを頂きました。出来上がったすいかを見せに行った際には「大学生が養母すいかの栽培に取り組んでくれて嬉しい。」と言っていただき、取り組んでよかったと思いました。栽培の実習が終わってからも船倉さんと交流しており、私の進路の話や船倉さんの家族の話などいろいろな話をするようになりました。今では、何かあったら報告に何うようにしています。

6年間の学生生活は家族をはじめとした、たくさんの人たちに支えられてきました。関わる全ての人たち

に心から感謝しています。

大学院修了後は鹿児島県の農業の職員として働く予定です。従事する業務は試験場での研究か各地域振興局での普及指導か農業系の事務職か、勤務地も離島を含めてどこになるかわかりませんが、今まで学んできたすべてのことを活かして一生懸命頑張っていけます。



日置市東市来で「養母すいか」の栽培に取り組んでいらっしゃる船倉保さん

畜産科学コース



「〇に染まった大学生生活」

家畜育種学研究室

学部4年 岩野 聖史

私のキャンパスライフは、大学入学前の私では想像もできないものに染まってしまいました。それは「馬」です。農学部に入学したのは動物が好きだったためでしたが、サークルは動物と関係ないものに入ろうとしていました。しかし1人の友人にある部活に勧誘されます。連れていかれた先は馬術部、そしてそれが私のキャン馬スライフの始まりでした。

結局そのまま馬術部に入ることにしたのですが、やはり動物を扱うことは簡単なことではありません。毎日朝早くからの活動に加えて昼、夕方、夜の餌やりをする必要があります、1日が馬で始まり馬で終わります。1頭1頭の様子を見ながらの作業は、状況によっては命に関わるほど重要になる場合もあり、慣れてきても気が抜けません。さらに2年生の冬からは、学生大会の運営等を行う九州学生馬術連盟幹事長を務めることとなり、事務的な馬の管理や様々な社会経験もさせていただきました。

さて、3年生の9月頃、先ほどの友人からまた勧誘がありました。今度は霧島の馬牧場へ呼ばれます。そ

(6) あらた同窓会学生向け会報

ここには草原でのびのびと暮らす馬たちとカウボーイ・カウガールが活動する、まさに西部劇の世界が広がっていました。その世界にあつという間に引き込まれてしまい、気づけば私もカウボーイの端くれです。大学馬術部とは馬の種類、扱うための道具などが大きく異なるため、馬の世界の奥深さを実感します。1年たった今でも毎週末霧島に通い、そこの手伝いをさせていただいています。

馬は、人が馬に対して行ったことに良くも悪くも正直に返してくれます。そこがキャン馬スライフを楽しく送ることが出来た所以だと思います。残された大学生活も馬と満喫しつつ、馬の良さを多くの人に伝えられればと思います。

食料農業経済学コース



「自己投資額200万」

農業経済学研究室

学部4年 下田 真由美

私は大学4年間で200万を超える自己投資をしました。

まずは旅行で170万程使いました。国内は北海道から沖縄まで、アクティビティはスカイダイビングからハイキングまで経験しました。海外はアジアを中心に廻りました。恐らくこの記事が載る頃はヨーロッパを廻っていると思います。

次に資格で20万程度使いました。宅地建物取引業、ファイナンシャルプランナー、HSK、簿記など。受験費、教材費等を合わせた額です。

次に美容で10万使いました。歯のホワイトニング、眉のアートメイクをしました。私の偏見ですが、人の印象は歯と眉で大きく変わると思います。どんなに綺麗な人でも歯が汚かったり、眉が整ってなかったりしていたらマイナスなイメージが強くなると思ったのでそれらをしました。

では、このお金はどこからくるのかという疑問が生まれると思います。まず私はたばこ、お酒、化粧品や洋服等は興味がありませんでした。女性なら分かると思いますが、アイシャドウやリップは誕生日プレゼントで貰ったものを3年近く使っていたり、洋服はGUやユニクロ、セカンドストリートが多かったです。散髪は1000円カット、髪染めはセルフでしていました。

食事は自炊がほとんどで、カフェ巡りやインスタ映えな食べ物にも興味がありませんでした。呑みや外食は誘われた時だけ行っていました。

他には、資格勉強で使用した教材はメルカリなどで売っていきました。中古品ですが元値の7割程度で売れました。

単純計算ですが、 $200万 \div 4年 \div 12ヶ月 \approx 4万/月$ 程度です。私は大学生に向けて中学生から貯金をしていたので、もっと負担は軽かったのですが、決して誰もが出来ないことではないと思います。意識が変わると思います。

大学生だからこそ出来る事は沢山あります。私はもっと時間があれば、500万程まで自己投資したかったです。

食料生命科学科

食品機能科学コース



「高校からの友人とバスケ部」

生命高分子化学研究室

学部4年 内立輪 皆斗

私の大学4年間はバスケ部とともにありました。しかし、入学した当初はバスケ部に入部したいという気持ちは大きくありませんでした。私自身、中学生までは野球をしてバスケットは高校生から始めており、一つのスポーツを長く経験してきたわけではないので、大学では新たなスポーツに挑戦したいと思っていました。そのような考えであった私がバスケ部に入部するきっかけになったのは、高校で同じバスケ部であった友人の存在です。その友人と共にいくつかのバスケサークルや部活動の見学をして、友人は「バスケ部に入部する」と私に言ってきました。私は、他のサークルにも興味が湧いていましたが、友人がバスケ部に入部したのに私はバスケ部に入部しないというのが嫌でバスケ部に入部しました。友人に流される形で入部したバスケ部ですが、4年生となった今は他のサークルに入らなくて良かったと思えるぐらいバスケ部に入部したことに満足しています。

私がバスケ部に満足している一つの理由として、バスケ部が「ありのままの自分でいれる存在」であった

ことがあります。高校生までの私は顧問の先生に叱られるのが嫌で、叱られないように自分を取り繕ってプレーをしていた部分がありました。しかし、大学生になると部活動に顧問の先生はおらず、自分のプレーを評価してくれるのは先輩方であり同じチームの仲間でした。自分のプレーに対して多くの仲間が指摘をしてくれ、自分でそれらの意見を参考にして反省をし、空いた時間で改善に努めて、練習で試しました。自分で考え努力をしている分、結果が出たときはとても嬉しく達成感が大きかったです。今では自分のプレーに自信を持つことができ、大学生までバスケをしてきたことにも誇りを持つことができます。

私をバスケ部に誘ってくれた友人と、私の大学生活を色鮮やかに彩ってくれたバスケ部に対してとても感謝しています。

食環境制御科学コース
(農林水産学研究科・農林資源科学専攻
・植物生産科学コース)



「エリアンサスと共に」

植物栄養・肥料学研究室
修士1年 川崎 諒也

皆さんはエリアンサスという植物を知っていますか。エリアンサスは熱帯・亜熱帯地方に生息する、いわゆる海外の植物であり恐らく、いや絶対、大抵の方は見たことも聞いたこともないと思います。私も今の研究室に配属されるまで全く知りませんでした。ちなみにエリアンサスとは、葉と茎の部分をバイオ燃料として利用することを目的とした資源作物というもので、それ故に高さは3mを軽く超えるほど大きくなります。さらには葉と茎を根こそぎ収穫しても次の年には元通りになるだけにとどまらず、さらに大きくなるという再生するたびにより強大になるという何かの漫画の敵キャラみたいな能力を持っています。こんな化け物みたいな植物と初めて出会ったのは、研究室に配属されて間もない頃先輩がすでに栽培していたエリアンサスへ肥料を与えに行った時でした。大きさにも驚いたのですが、それよりも葉の1枚1枚が鋭利なことによって生み出される針山のような風貌にかなり恐怖を感じたことを今でも覚えています。

そして自分の行う研究がエリアンサス栽培についての研究に決まったので先輩のエリアンサスを引き続き

栽培することになり、今後どこまで大きくなるのかと楽しみにしながら栽培していたのですが、諸事情により今年の春をもって全てのエリアンサスを撤去することになってしまいました。そこで場所を変えてエリアンサスを苗から育て始めました。まだ1年目なのでかなり小さいですが、いずれは3mを超えるほどの大きさに成長するので、我が子の成長を喜ぶ親のごとくその時が楽しみです。私もエリアンサスに負けないうらい1人の理系の人間として成長できるよう残り1年半の大学生活を大事に過ごしていきたいと思います。

焼酎発酵・微生物科学コース
(農林水産学研究科・食品創成科学専攻
・焼酎発酵・微生物科学コース)



「ついに『住めば都』を感じた」

醸造微生物学研究室

修士1年 李 愛友美

鹿児島での生活もあと1年と半年程になった(うまくいけば)。これから残された時間は研究や就活に追われるだろうから、この場をお借りして今のうちに鹿児島での生活を振り返っておきたい。

私は2年の浪人の末、志望していた分野への進学を成績不足で諦め、鹿大農学部に来た。どきどきわくわくして過ごした1年目。友人との運命的な出会いや初めてのバイトでの失敗など、毎日が目まぐるしくあっという間だった。しかし、地元が恋しく夏休みは1ヶ月も帰省した。

2年目は学業に力を注いだ。テスト前には学科の仲間が集まって勉強した。覚え方を考えたり、教えあったり、生粋の日本人なのに日本語が苦手な人がいたりして、賑やかだった。朝から夜まで勉強したご褒美に、打ち上げ花火を観に行った。そのとき花火の横に流れ星をみたのを覚えている。私が今大学院に通えているのは、こんな友人たちがいたからだと確信している。

3年生になると授業はオンラインになり、ほとんどを家で過ごした。映画鑑賞や料理など楽しく自粛生活を送っていたのだが、誰にも会わずにいると自然が恋しくなるものなのだろうか、突然海が見たくなったりした。自転車で10分程の与次郎に向かい、雄大な海、空、桜島に癒され、こんなに恵まれた環境が他にある

(8) あらた同窓会学生向け会報

だろうか、と思った。

4年目の今、正直鹿児島の方が年々好きになっていと感じている。今だから言えることだが、鹿児島に来てよかった。周りの人々に恵まれ、豊かな自然に恵まれ、学んでいて楽しいと思える学問に出会えた。故郷を離れて家族のありがたみも知ることができた。過去があるから今があると思えるようになった。私が何となく持っていた「結局なんとかなる」精神を、鹿児島が揺るぎないものにしてくれた。地元大好き人間の私だが、ホームがもうひとつできたような感覚だ。大学院を出て就職し、またいつか鹿児島を訪れた時「ただいま」と言ってしまうような気がする。



農林環境科学科

森林科学コース



「責任の重要性」

森林政策学研究室

学部4年 吉井 聖裕

わたしにとって異国の地であった鹿児島での生活も早3年と半年、鹿児島でのニュースを無意識のうちに目で追う程度には愛着もわいてきた。鹿児島大学での生活はやはり最初が一番大変だったように思う。人付き合いの距離感、言葉遣い一つとっても気を遣ったものだ。そんな気遣い合う関係も気の置けない関係へと変わっている。時の流れをしみじみと感じる。

そんな大学生活で唯一3年半一度も途切れさせたことがない習慣がある。家計簿だ。家計簿に固定費と生活費を付け、毎月集計する。これだけは欠かしたことがない。大学生としては毎日の学習などといえれば、それに越したことはないであろう。お恥ずかしい限りである。しかし、わたしの大学生活において家計簿が成長に欠かせないツールであったことに間違いはない。家計簿に付け続けた3年間の支出、その総額はともわたし自身のバイトでは補うことができないものである。毎月毎月、自分のアルバイトでの収入を超える支出を繰り返し、収支の欄にマイナスが付くたびに両親や周りの人たちの助けで活かされていることを実感し、感謝できる。こんなこともないと両親からの支え、自分がどれだけ恵まれた環境にいるのかを意識することができない。まだまだわがままな子供のまな

のだと自覚させられる。いつの間にかとくに成人を迎え、22歳になった。未だ自立できていない悔しさと失敗しても帰る場所があるありがたみをやっと意識するようになった。大学に入学したとき、もう『自由』だと思ったものだが、何のことはない自由の意味をはき違えていたのだと3年かけて気づくことができた。

『自由』という文字は『自らを由とする』と書く。自分の人生について自分で責任をとるという意味になる。そうであるならば、これまでの無責任に人のすすめを聞き入れるだけの人生ではなく、自分の責任で人生を謳歌したい。最後に自分を一回り成長させてくれた大学生活にありがとう。

地域環境システム学コース (農林水産学研究科・環境フィールド科学専攻 ・環境システム科学コース)



「遠方の同朋」

農地工学研究室

修士2年 中野 瑞希

修士課程の学生生活は、新型コロナウイルスの感染拡大とともに始まった。同期や先輩は就職していき、学内の活動は制限された。講義やTA、就職活動、そして研究など、専門分野に関して多くの疑問や不安があったが、相談できる相手や機会は限られていた。進学やコロナ禍により、同様の悩みを抱えた人は少ないのではないだろうか。本文では、その解決策の一つとして、他大学の学生との交流について紹介したい。

今夏、学会が後援する学生主催のセミナーに実行委員として参加した。全国の農業農村工学分野の学部、修士、博士学生や若手社会人がオンライン上に会した。企画を進める中で、分野内の交流をより活発にしたい、継続的なものにしたいという声が多数挙がった。進級、進学に伴って専門性が高まるにつれて、その関連人口は減ってくる。専門性が近く、かつ同年代の相談相手を増やすためには、外部とのつながりが必要だ。

これまで、自分の未熟さが気がかりで、このような専門分野における交流の機会は避けていた。しかし実際に参加してみると、他の学生が同じような悩みや不安を持つことに安心し、知識の深さや視野の広さに刺激を受け、異なる経験からくる多様な意見とそれによ

る議論の発展が面白かった。そして、もう少し早く参加していれば、より効果的、効率的に学習や研究を進めることが出来たのではないかと後悔した。

振り返ると、これまでも集中講義やインターンシップ等の他大学の学生との交流がその後の学習意欲向上や進学、就職の決定につながってきた。今、対面での交流の機会は減少してしまったが、距離に関わらないコミュニケーション手段が確立されてきた。専門分野のコミュニティはハードルが高いと感じるかもしれないが、もし機会があるなら積極的に参加して欲しい。そこでの交流は自身の助けとなり、自身の意見もまた、誰かの助けになるだろう。



国際食料資源学特別コース(農学系サブコース)



「鹿児島での海人生活」

植物栽培・機能学研究室

学部3年 渋谷 啓太

私は国際食料資源学特別コース生として農学分野においての専門的な知識と国際的な食料問題の解決について学び、農学漬けになる日々を想像して入学した。

確かに農学分野の学びの機会は多かったのだが、現実とは異なった。

全ては、国際食料資源学特別コースでは農学と同時に水産学を学ぶこと、さらにはダイビングサークルに所属したことが転機となる。

このサークルには高校の先輩が偶然にも所属しており、知り合いがいた方が溶け込みやすいと考え、半ば適当に入部したのだ。

そんな私とダイビング、水産学との偶発的な接点が生まれたことで、予期せぬ“海”が身近な存在となり、キャンパスライフを充実させるダイビング生活が始まっていった。

サークル活動は主に2つ。1つは毎週末鹿児島県枕崎市の海を中心に潜りに行くこと、もう1つは夏・春休みに沖縄県伊平屋島、鹿児島県喜界島にダイビングに行くことがメイン活動である。初めて離島で潜った際には、海の透明度が驚くほど高く、水面に浮かんでいるのだが、まるで空に浮いているかのような感覚に陥ったのを今でも鮮明に覚えている。私にとって海は魅力的なものだった。

ダイビング目的に、離島でサークルメンバーと共

に過ごす“島生活”は中毒性が高く、刺激的で非日常的日々だとも言える。

サークル活動すべてを含む「海人生活」が私にとってかけがえのないものとなった。

鹿児島大学を選択してなければ出会うはずのなかった海との出会いが私の生活そのものに多大なる影響を及ぼしたのだ。

入学と同時に鹿児島に来て、予期せぬ“海”との偶発的な出会いから没頭できる趣味に出会い、想像もしていなかった充実したキャンパスライフを送っている。

人生何があるかわからない。人生予期せぬことが起き、なるようにしかならない。

だからこそ楽しく、面白いのだと深く実感した。

そして今だからこそできる事に力を注ぎ、後悔しないような残りのキャンパスライフを過ごそうと思う。

メモリー

～進路・就職に役立つ先輩の経験・体験談～

教育実習奮闘記



「教育実習奮闘記」

農業生産科学科 畜産科学コース

家畜育種学研究室

学部4年 桐田 友理乃

私は3週間の農業高校への教育実習を通して、学校教育に携わる者としての自覚や教員の魅力を強く感じることが出来ました。

まず、1週目は様々な先生方の授業を生徒と共に体験し、指導者の在り方を学びました。50分間の授業で、生徒にどのようなことを身につけてほしいのかなど、授業目標の明確な授業にすること、そのための事前準備の重要性を強く感じました。

2週目からは担当のクラスを持ち、授業や実習も行いました。私のクラスは農業科の3年生でした。初めてのクラスの生徒との対面時には、あまりの緊張に正直記憶がありません。しかし、生徒が私の名前を呼んでくれたり、色々な話を聞かせてくれたりと、嬉しい気持ちとともに楽観的な生徒たちに心救われました。

担当科目は「野菜」を選択しました。高校時代に専

攻し、私を農学の道に導いてくれた科目で指導したいという思いから、大学とは異なる科目に挑戦しました。「野菜」や「農業と環境」等の授業の中で有畜連携や循環型農業、有機堆肥など農作物の生産に畜産の関わりも含めて講義できたのは、私だからこそ出来た授業の展開だと思っています。また、机間指導などの大学で学んだ生徒指導法も実践でき、大学の知識や技術が教育実習に役立つことを感じました。

実習中の担当教員からの印象的だった言葉は、「完璧な授業はない。」です。職員室では常に生徒の話をし、職員間で共有することで、生徒一人一人が快適に学習に臨める環境の整備に配慮していました。また、一般的に「教員はブラック」だとよく耳にします。しかし、それは日々生徒のことを第一に考え、より充実した学校生活を送ってほしいという熱意が労働に示されていることを知り、教員志望が強固になりました。

最後に、この機会を与えてくださった鹿児島大学や教育実習でお世話になった方々に感謝し、残りの大学生活を通して改めて自分と向き合い、今後も立派な教員を目指して努めていきたいです。



「教育実習を終えて」

食料生命科学科 食品機能科学コース
食品分子機能学研究室
学部4年 小田 莉央

5月に母校で2週間の教育実習を行った。私が所属している学科では教職履修者は1人しかいない。卒業単位とは別に教職科目を取得する必要がある、実験やテストが被ると大変なこともあったが、学校支援ボランティアに参加したり、教職に就く知り合いの声を聞いたりする中でやりがいのある仕事だと感じ、最後は「ここまで頑張ってきたならやりきろう」という気持ちで前に進んだ。

来年実習を控える3年生の中には実習校で生徒と打ち解けることができるのか、授業をしたことがないのに教壇に立てるのかと不安に思っている人も多いと思う。私もこの不安を感じていたが、いざ実習が始まると指導教諭の先生方が指導案についてアドバイスをくださり、授業を見学する中で、声の掛け方や授業の進め方についても質問することができたので、授業を形にすることはそこまで難しくなかった。学校に入ると1日目から「先生」と呼ばれる。若手の先生、ベテランの先生というのは子供達には関係ありませんという

授業で聞いた言葉を思い出し、私も生徒にとっては先生なんだという自覚が湧いて、学生であることを言い訳にせず、より良い授業を作ろうという気持ちになった。苦戦することも多々あったが、先生の授業が面白かった、先生のおかげで次のテストでいい点がとれたという手紙をもらった時には本当に嬉しくて、教師のやりがいを感じる事ができる実習になった。ご多忙の中、またコロナウイルスが流行する中で島外から来る私たち実習生の指導を受け入れて下さったことに本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。

この経験は進路を考えるきっかけにもなった。高校時代から知っている先生に「一緒に働けるとしたらそれは嬉しい。だけど、進学するならいろんな可能性を考えて見るのもいいと思うよ。」という言葉もらった。教員免許は教員になりたい人だけが取るべきだという風に言われることもあるが、私は教師になったとしても、教師にならなかったとしてもこの4年が無駄になるとは思わない。敢えて、いろんな可能性を提示してくれた先生の言葉を受けて、もう一度自分の将来を見つめ直すきっかけをもらった。これから私は大学院に進学する。指導してくださった先生方や慕ってくれた生徒に胸を張って進路を伝えることができるような2年間を春からの大学院生活で過ごしていきたい。



「教育実習を振り返って」

農林環境科学科 地域環境システム学
農地工学研究室
学部4年 川東 史佳

私は、2週間母校の鹿児島県立武岡台高等学校で生物の教育実習を行いました。今回は、教育実習の集大成である研究授業について書こうと思います。

研究授業は、パズルを活用して「ニューロンの構造」を理解させることで、生徒が楽しんで学べるような内容で実施しました。しかし、前日の模擬授業では、緊張と準備不足で、予定の(6割)でチャイムがなってしまうしました。指導教員から「仮に5分ミスしたら、5分×38人(生徒)=190分と同じ時間価値を奪うことになるんだよ。授業中のミスの代償は大きいから、きちんと授業の準備をしなさい。」と教えていただきました。指導教員から指摘された点を改善してよりよい授業にしようと思い、今まで学んだことを元に精一杯の準備をしました。

そして、迎えた当日、大学の担当教諭、高校時代お

世話になった先生方も来てくださり、教室の後ろには十数名の先生方が来てくださいました。生徒達もいつもと違う教室の雰囲気緊張した様子でした。私も始めは緊張していましたが、生徒達に集中して笑顔で授業を進めていくうちに緊張がほぐれました。こだわったパズルは、生徒同士で試行錯誤して楽しく学習することができました。授業後、生徒達が「先生授業楽しかったよ！先生の頑張りが伝わって私達ももっと勉強を頑張ろうと思った！」と言ってもらえました。一生懸命に準備したことが伝わり、授業が楽しいと思えてもらえたことや学習に興味関心を持ってもらえたことが本当に嬉しかったです。教師としての「教える喜び」を少し味わえたと思います。

2週間、自分が生徒として通った高校に先生という立場で勤務することはとても新鮮で、先生方はこんなにも生徒のことを考えてお仕事をされていると知ることができ貴重な体験となりました。指導教員をはじめ、お世話になった先生方や生徒の皆さんに対して感謝の気持ちで一杯です。この経験を大切に、次のステップでも頑張ります。

インターンシップ体験記



「インターンシップを終えて」

**農業生産科学科 応用植物科学コース
害虫学研究室**
学部4年 神田 梨華

私は、昨年度の夏休みに、鹿児島県庁の農政部経営技術課での、3日間のインターンシップに参加させていただきました。参加した目的は、農業の知識を活かす仕事について、より詳しく知るため、そして、実際に仕事を体験したり、職員の方々の話を直接聴いたりすることで、自分自身の見聞を広める良いきっかけになると考えたからです。

主に鹿児島での就農支援策や、農薬取締法、肥料取締法の話聴き、資料作成、印刷の仕事の一部を体験させていただきました。また、農業開発総合センターの見学もしました。自主栽培のこと、今後研究したいことなど、大学での自分の話をする機会もありました。部署内は和やかな雰囲気で、何でも話しやすかったです。資料作成中、質問に対して気さくに応じてく

ださったり、指定された部署へ向かう途中迷子になったとき、通りすがりの職員の方が案内してくださったり、みなさん親切でした。将来あのような大人になりたいと思いました。

この3日間を通して特に印象的だったのは、挑戦する姿勢と、幅広い人間関係です。勤務地や部署の異動により、物事を多角的に考えられるようになることがわかりました。より多くの人を支えるためには、幅広い分野への挑戦の繰り返しが必要だと思いました。職員の方々は、鹿児島県の農業の発展や支援といった、同じ目的のために、県庁内の職員同士だけでなく、他の勤務地の方々とも一体となり、働いていました。社会人は、こんなに多くの人とつながりがあるのだと思い驚きました。そして、どのような仕事でも、自分の知識、働きによって見知らぬ誰かとつながり、助けてあげられることが喜びであることに気づきました。

学校で学べないことをたくさん学べた、とても貴重で有意義な体験でした。卒業後、社会人となり働くことに対して非常に不安を抱えていますが、経験して得たことや考えたことが、いつか役に立つ、自分自身を救ってくれると信じています。



「インターンシップを終えて」

**食料生命科学科 食環境制御科学コース
土壌科学研究室**
学部4年 大坪 季生

私は8月下旬の5日間、佐賀県庁所属の佐城農業改良普及センターにてインターンシップに参加させていただきました。私自身、もともと農家の方々に直接接して、技術的な指導や経営相談に応じるなどの資格を持つ普及指導員という国家資格に興味がありました。そこで、その資格を持つセンター職員の方々のもとで学ばせていただきたいと思います、インターンシップに参加しました。

普及センター内の普及指導員の方々は主に稲や麦、大豆などの作物の部門、中山間地域に農家の方々が集中している果樹の部門、その他の野菜の部門ごとに分かれて仕事をされていました。全ての部門でその普及指導員の方と、農家の方々の所へ直接訪問して、お話をうかがう機会が非常に多くありました。その中でも、イチゴ農家の方からうかがった話が最も印象的でした。その農家の方は実家が農家だったこともあり、30歳で企業を退職し就農され、経理と技術を両親に頼

ることなく習得したいということで農業を一からご自分で学ばれている方でした。その方に将来的には、自分は農家などの生産者の方々の支えになるような職に就きたいと話すと、「たとえ農家ではなくとも農家に必要な知識や経験をたくさん得て、私のように貪欲な姿勢で多くのことを吸収して、農家に頼られる存在になってほしい」と言われました。その経験を機に私の「農業に向き合う姿勢」が大きく変わりました。

他にも、新規就農者を増やすための取り組みであるニューファーマー塾に参加して、農業における基礎的な知識を習得し、農業用機械の導入が難しいとされている中山間地域にてウンシュウミカンにドローンでの農薬散布を行う実験を現場で見学させていただくなど、表面的なことだけでなく現代における農業分野の課題から先進的な農業技術まで幅広く学ばせていただきました。

今回のインターンシップでの5日間は大学の講義や実習では味わえない貴重な経験をすることができました。インターンシップで関わっていただいた佐賀県の県職員の方々、農家の方々には非常に感謝しています。今回学んだことを生かして、社会人では農業分野に貪欲な姿勢で臨み、多くの農家の方々に貢献していけるよう頑張ります。



「オンライン企業訪問体験記」

農林環境科学科 森林科学コース
砂防・森林水文学研究室
学部4年 貴島 万萌

森林キャリアデザインでのインターンシップは進路について考えを深めるきっかけになりました。森林キャリアデザインは、林業に関する仕事について現場見学などを行う集中講義です。私が受講した年は新型コロナウイルスの影響で現場見学は実施されず、オンラインでの企業訪問がありました。最初に参加企業30社による全体説明会がありそれぞれの会社の概要を知ることができました。建設や森林整備、砂防など多種多様な業種の企業がありました。全体説明会後は3社を選択し、より詳しい説明をきくことができるコアタイムが設けられていました。私は、ダム建設など河川事業を行う企業、建設企業、治山事業など砂防に携わる企業の説明会に参加しました。カメラをつけてお互い顔を合わせ少人数で行われるため質問しやすく、親しみやすかったです。具体的な情報を聞くことがで

き、より深く理解することができました。オンラインには最初不安もありましたが画面越しでも企業の雰囲気伝わってくる充実した説明会でした。

私はもともと公務員志望で民間企業のインターンシップには行く予定はありませんでしたが、集中講義のカリキュラムとして参加する機会に恵まれ、林業に関する多くの業界や民間企業を知ることができ、今まで目を向けてこなかった民間企業の魅力も知ることができました。お陰で、「なぜ民間企業ではなく公務員を志望するのか」「森林を専門とする公務員として何をしたいのか」を自問自答できる良い機会になりました。私はインターンシップに参加することで視野を広げることができ、自分の就職活動にも良い影響を与えてくれると思いました。進路に迷っている人もそうでない人も、インターンシップはよい刺激となるかもしれません。

就職活動体験記



「コロナ禍の中の就職活動体験記」

農林水産学研究科 農林資源科学専攻
植物生産科学コース 害虫学研究室
修士2年 大野 竜弥

コロナ禍の就職活動は今まで聞いていた先輩方の就職活動とは全く違ったものであり初めは全く何をしたら良いか分からない状態が続きました。そのために自分ができることを何でもしてやろうという気持ちで臨みました。某大手食品メーカーを受けた時には、自分が力を入れた活動と特徴をまとめた動画を送付するのがありました。私はこの動画をアメリカンフットボール部で鍛え上げた筋力とユニークさをアピールするべく、部活動時代に作成した私のポスターを背景にフライパンを曲げる動画を送りました。この動画は研究室の先輩方にも手伝ってもらい（S先輩・I先輩ありがとうございました）3日もかけて撮影し高評価を頂いたのですが、残念ながらこの企業とはご縁がありませんでした。私はこの悔しさをバネに就職活動をつづけました。

また、私は面接が得意であると思っていたのですが、実際に面接を受けてみると非常に難儀でありました。特にオンライン面接では相手との会話の間や表情

の読みづらさが予想よりも大きく、苦手であると分かりました。そのために、私は序盤に受けた企業には軒並みにご縁がなく精神的にも辛い日々を過ごしました。私は何か流れを変えようと自分にとって挑戦となる企業を受けました。今までの面接とは違い緊張することなく自分を表現することができました。この面接を皮切りに自分らしさを面接で表現できるようになりました。最終的にこの企業にご縁があり私の就活は終わりました。最終面接で部長が言ってくださった「最後は大野君がうちを選ぶか決めてほしい」この言葉を私は生涯忘れません。

最後に後輩たちにメッセージを残します。コロナ禍の就活は今までの先輩方が行ってきた就職活動とは違うものであるかもしれません。しかし、企業に求められていることはその人自身の本質であり根幹は変わりません。自分が積み重ねてきた努力と実績を信じて頑張ってください。



「苦しみながらも戦えた私の就職活動」

農林水産学研究科 食品創成科学専攻
食品科学コース 食品化学研究室
修士2年 里 圭太

私の就職活動は、“コロナに助けられた就活”でした。誤解のないように言うと、“コロナによって加速したオンライン化”に助けられました。その結果、夢だった研究職として、味の素株式会社で来年度から働くことができます。

これまで、地方の学生は、説明会やインターン、本選考を受けるために各地に飛び回らなければなりませんでした。先輩からは「30万円は貯金したほうがいい」と言われるほど、都心の学生と比べてお金がかかります。しかし、オンライン化により、場所を選ばず、どこでも就職活動ができるようになったのです。これは地方の学生にとって間違いなくポジティブな変化です。

また、私は就職活動のいちばん大切な時期である3月末に、肺に穴が空いてしまい、1週間の緊急入院をしてしまいます。そしてこの1週間には、大事な第一志望の一次面接が控えていました。これまでのアナログな就職活動だったら、面接を受けることができず、辞退せざるを得なかったかもしれません。しかし、病院側の協力もあり、私は病室からオンライン面接を受けることができました。そして、運命的に、その企業

に来年度入社します。このように、私の就職活動は“コロナによって加速したオンライン化”にかなり助けられました。

思えば、就職活動は苦しい思い出しかなく、辛いことばかりでした。私は研究職を志望していましたが、研究職は採用枠が少なく、戦う相手はほとんど旧帝大出身の人たちです。学歴なんて関係ないと自分に言い聞かせても、意識してしまうものがありました。ですが、指導教員である宮田先生のご指導のもと、これまで培ってきた研究に対する考え方や姿勢、プレゼンの技術に至るまで、身につけてきたもの全てを出し切った結果、なんとか内定をいただくことができました。

しかし、本番はここからです。自分の中にある信念を大切に、世の中に大きなインパクトを与える製品を生み出すために、日々精進していきます。



「就活体験記」

農林環境科学科 森林科学コース
森林保護学研究室
学部4年 池田 裕作

私は福岡県出身で、鹿児島大学進学を機に、この鹿児島県へ。森林やそこに生息している生き物に興味があり、森林・林業について学ぶことができる森林科学コースに所属し、勉学に励んできました。

3年の後期となり、人生における一大イベント「就職活動」をするときがやってきました。しかし3年の春頃から、新型コロナウイルスによる規制が行われ、企業説明会やインターンシップがオンラインで行われるなど、通常とは異なった就職活動を行わなければならない事態となっていました。最初は何をしたらよいかかわからず、とりあえずオンライン説明会に参加だけするようなことが続いていました。

そんな中、きっかけとなったのが森林キャリアデザインという農林環境科学科での講義でした。その講義では製材や林業に関する企業様や、森林組合の方など、私が興味のある分野の業種の方々が鹿児島大学の学生向けに説明会を準備してくださり、私の進路にとっても役に立つ講義でした。講義を受けていく中、岡山県の企業に興味を持ち、企業説明会に参加しました。その企業の方々は和気藹々とした雰囲気です。不安がっていた私をあたたく迎えてくださり、この企業で成長したい！と思うようになりました。そして迎えた6月の採用面接。見事内定をいただくことができ、これま

(14) あらた同窓会学生向け会報

で自分がやってきたことが実を結んだ瞬間でした。

インターンシップ、企業説明会など、すべてがオンラインで行われる中、企業選びはとても大変でした。どんな場所にあるのか、どんな環境なのか、どんな人が働いているのかなど、自分の目で見るのが困難なため、慎重に行う必要がありました。内定をいただいた企業様は鹿児島大学出身の方も多く、面接の雰囲気も非常によかったのも、今ではすごく働くことが楽しみになっています。鹿児島大学で学んだ知識を社会へと還元し、貢献できるよう努力して参ります。

留学体験記



「コロナ禍のニュージーランド留学」

農林環境科学科 地域環境システム学コース
農地工学研究室
学部4年 宮原 直也

2020年3月、私はニュージーランドにワーキングホリデーという制度を利用して渡航をした。私が渡航をした時期は、新型コロナウイルス感染症が世界に拡がり始めた3月であったので、渡航後に状況がひどくなることは予想が少しはできたが、それでも計画を立てた留学を簡単にあきらめたくないという思いから、家族の同意の上で渡航することを決断した。

現地に着くや否や言葉の壁を実感した。自分の伝えたいことが全く伝えられないことに気づいた。また、日本と同じように新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の脅威は初期の段階では不安が多かった。渡航2週間目で、感染者は少なかったがロックダウンという措置が取られた。これは2か月程度続き、語学学校もオンラインになり、生活面においても苦しい期間が続いた。この期間に悲観的になるのではなく、ホームステイ先でのホストやシェアをしている友人との行動を大切にするようにした。学校の時間以外でも、ほとんどだれかと英語で話すようにしていた。その成果もあり、ロックダウン期間中で、日常生活にはほとんど問題がなくなった。アーダーンNZ首相や政府の功績もあり、この期間以外はほとんどノーマルな生活に戻り、マスクなしでの生活を送ることができ、ラッキーだったと思う。

現地での仕事は、最初は日本食レストランでのア

ルバイトであったが、その後はキウイ農園でのアルバイト、WWOOF（World Wide Opportunities on Organic Farms「世界に広がる有機農場での機会」）を利用したボランティアなど現地の人と一緒に働くことができた。同じ日本レストランでも海外のお客さんへの接客は、最初は苦勞することが多かったが、同僚の助けもあり、頑張ることができた。

今回のニュージーランドでの経験を通して、自分の人生の幅が広がったと思う。海外に出なければ、一生関心を持たなかったような国の人との交流、異国での生活体験など、政治や宗教の違い、ネットなどで見ている情報ではなく、直接体験するということは、自分にとって刺激的な毎日になった。将来は、海外でも活躍できるような人材となれるように何事にも日々努力していきたいと思っている。

※World Wide Opportunities on Organic Farms「世界に広がる有機農場での機会」の頭文字です。WWOOFは、有機農場を核とするホストと、そこで手伝いたい・学びたいと思っている人とを繋いでいます。

※有機農業とは、無農薬、無化学肥料で作物を栽培する農業で、人間と動物、環境にも考慮した農法です。農薬を使う方法より手間がかかり、また大型機械を使わない場合が多いです。



語学学校の仲間と



ニュージーランドの自然



キウイ農園の風景



WWOOF



霧島からみた桜島遠景



錦江湾に浮かぶ桜島

編 集 後 記

今年の後期授業は、いきなり“リモート”(遠隔)のみのスタートとなりました。学生の皆さんも我々教員の方も、「もう慣れました。」という感じかも知れませんね。しかし私は10月に集中実施する実験科目を担当していますが、実験の授業を“リモート”でやれというのは、かなりの「無茶ぶり」だと思います。実験や実習というのは、実際に手足を動かして、体験して身につけることを目的とするものです。教員がやるところを動画に撮って、それを見てもらって解説をしても、やはり実際に体験した実感が無ければ、学生の皆さんも実験や実習の授業を受けたという気がしないのではないのでしょうか。

それと“リモート”の授業にはもう一つ落とし穴があって、Zoomに接続してしまえば、後は何をしても先生はわからないという安心感があるのではないのでしょうか。もちろん先生方もResponを使って出席をとったり質問に答えさせたり、いろいろ工夫をされています。しかし、限界はあるでしょう。授業への参加ということに関して遠隔授業は自由度が大きく、よほど自覚を持って臨まないと本来の目的を達成するのが難しいという面はあると思います。教員の方にもある意味、自由度が大きい面があり、「“リモート”がいい。」と言う先生方もおられますし、世間も持て囃している傾向があるように感じます。でも私はどうも苦手です。歳のせいですかね。

(文責 食料生命科学科 樗木 直也)

鹿児島大学農学部 あらた同窓会

〒890-0065 鹿児島市郡元一丁目21-24

TEL・FAX 099(285)8537

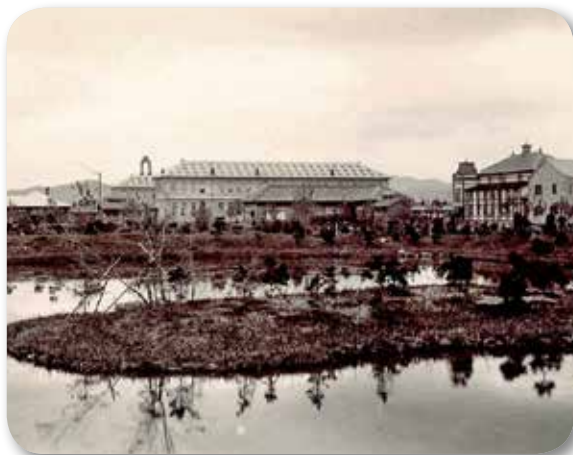
e-mail(aratakai@mc2.seikyou.ne.jp)

振替口座 02010-2-876

事務局の業務日 月・水・金(10:00~16:00)

印刷所	株式会社鹿児島新生社印刷
住所	鹿児島市七ツ島1-3-21
TEL	099-261-0111
FAX	099-261-3100
E-mail	kagoshima@shinsei-p.co.jp

玉利池の変遷



大正3年撮影の玉利池



農学部開学100周年（2009年）で
整備した玉利池



現在（2021年）の玉利池



稲刈り実習風景（附属農場学内農事部）